

まで朝夕徒歩。歩くのが常道で、木原方面の連中も歩いてきた。だからその何れもが仮橋のご厄介になる。大勢で渡るときは橋だった、あの手摺りのすべすべした木の手ざわりもなつかしい。兩岸に真菰かさわいで藻刈舟が三艘二艘ともやっていた。なまぬるい水を破って、「むぐっちょ」がひょいひょいと顔を出す。一面の青田と蓮田。

現在の敷島町も匂町も小松町あたりも一斉に蓮の葉っぱが首を振っていたし、稲穂がそよんだりもしていた。わずかに三好町通り両側に家並が連なっていて駅前通りに出る。うなぎの養魚池があったりした。かわれば変る世の中、桜川の橋といえば、この仮橋のほかは、ただ遠く上流に銭亀橋があっただけだったと思う。桜川と言っても堤防は勿論現在よりずっと低かった。後に花見で賑わったあの桜、今はないが、当時はまだ植えられていたのかいなかったのか。仮橋の小松町よりのたもとに柳の木が一本あった。その垂枝に覆われるように、ささやかな団子屋があった。

したが、私達中学生もちょいちょい手のひらに銭を並べた。枝垂柳にほおをさすらせて一串、二串、甘くてうまかったこと、うまかったこと。勿論通学途上、かかる行跡は学校では断じてご法度。あの小母さんはその後どうしたことだろう。

春の弥生は桜川

そのみなもとの香をのせて

流れに浮かぶ花いかだ

葦の枯れ葉に秋たてば

渡るかりがね声さえて

潮心に浮くや月のかけ

なつかしい土浦中学校の校歌。当時、土浦中学校にはボートがあった。年に一度の学年対抗レースは、我々の心を湧かせたものだし、勝敗の結果は必らずというほどけんかになった。学校当局も悩みの種だったろう。場所は汽船場の方面で雷ヶ浦へと続くところ。俗称天王松。つまり往昔の桜川の河口という所になろう。ともあれ、そのボート幾艘かで桜川仮橋附近にとやってくる。団子屋の小母さんは手をたたくて歓迎するし、第一堤防に足をとめる若い女性でもいようものなら、勇氣百倍。胸を